

〔研究ノート〕

英国におけるパブリック・フットパスと地域振興 (part 2)

—小さな町村の Walkers are Welcome 活動とウォーカーと関わる観光産業—

塩 路 有 子

はじめに

本稿は、英国におけるパブリック・フットパス (Public Footpath, 以下フットパス) と地域振興について述べた拙稿 (塩路 2016) の続編である。2016年と2017年夏に実施した現地調査にもとづいて前稿とは異なる観点から地域振興の詳細について記述する¹⁾。

2018年5月現在、フットパスを活用してウォーカーを誘致することで地域活性化を目指す全国組織 Walkers are Welcome (以下 WaW) 協会に登録している英各地の WaW タウンは、100カ所になる²⁾。本稿では、このような WaW タウンのなかでも、小さな町村がどのように WaW 活動を展開し、地域振興を実現しようとしているのかについて具体的な事例にもとづいて述べる。

また、フットパスを「歩く観光」は、英国で年間8,000億円の経済効果があるとされている。その「歩く観光」において、旅行会社や宿泊施設などの観光産業がどのようにフットパスやウォーカーと関わっているのか、そしてそれがどのように地域振興につながっているのかについて具体的に明らかにする。

I 小さな町村における WaW 活動と地域活性化

1. 活性化活動の一つとしての WaW 活動

イングランド南西部のサマセット州にある人口約2,900人の小さな町、ウィバリスコム (Wiveliscombe) は、2009年に WaW タウンに

登録した。ウィバリスコムの WaW グループは、数名の有志で活動しており、運営委員会があるわけでもメンバーシップや会費のようなものもないが、それぞれの専門の知識や経験を活かして活動している。グループは、町と町民の愛称である 'Wivey' を冠して 'Wiveywalkers' と呼ばれており、2001年にウォーキング・グループとして始まった。現在も町周辺を歩く月2回のウォークを実施している。ウォーキングのメンバーは30人ほどで、毎回15人から20人くらいがウォークに参加する。ウォークは当日集まった人々で行うが、WaWグループとしてウォーキング・グループに対して保険をかける責任がある。

町の中心にある広場には、ウォークの地図が案内板になっており、WaWタウンのロゴが明記されている (写真1)。町には、現在は2軒になったが、かつてビール醸造所が数多く存在していた歴史があり、フットパスのコース沿いの家々の壁にはパブの印が残されており、元醸造所だった建物が多く見られる。また、牧場もあり農村としての風景も広がる。WaWメンバーによると、ウィバリスコムは生きた農村で、観光地化された他の町とは違うという。

町のコミュニティ・オフィスの建物は、もとは銀行だったが、現在は観光案内所、町議会議員の行政オフィス、警察、地域ラジオ局が一体となった地域のハブ施設になっている。そこでは地域の情報収集や発信と行政の取り組みがうまく連動している。以下のように、それらが WaW 活動に効果的に作用している。

コミュニティ・オフィスで働く人々の中に



写真1：ウォーキング地図をさすウィバリスコムのWaWメンバー
(2016年8月筆者撮影)

は、町のいくつかの大きなイベントや祭りを運営し、ラジオ放送を行う女性がいる。この女性は14年前にコミュニティ・オフィスに観光案内所を開設した人物でもある。彼女は、コミュニティ交通としてバスが走らないエリアや自宅への送迎を行うボランティアの配車システムも構築した。このことで、コミュニティ内の交通弱者が取り残されることなく生活できるようになったという。

また別の女性は、12年間ウィバリスコムでパブを経営した経験があり、この町で商店を営みビジネスを展開してきた。サマセット州のトントン地域の10教区のビジネス・グループの代表でもある。16年間そのグループで活動したことを活かして、ウェブサイトをもとめ、WaWグループのメンバーと一緒にウィバリスコムのWaW用パンフレットも作成した。トントンの経済発展に取り組むグループがウィバリスコムを支援しはじめたという。彼女はコミュニティ・オフィスでビジネスという視点から町の活性化に取り組んでいる。

コミュニティ・オフィスにいる町議会議員の1人は、地域のフットパスを担当している。地域には39本のフットパスがあり、フットパスの維持に関わるボランティアは25人いる。同担当

者は、住民やボランティアから寄せられたフットパスの情報について把握し、フットパスを維持管理している。

このような多彩な地域活性化活動がコミュニティ・オフィスで活発に展開されるウィバリスコムでは、WaW活動はその活性化活動の1つにすぎない。小さな町だが、WaW活動のみに依存するのではなく、多様な活動を通してコミュニティの住民が互いを認識し、交流することを促進している。そうしたコミュニティ意識やコミュニティをより良くしようとする住民の姿勢が基盤となり、WaW活動を効果的に促進することにつながっている。

2. 周辺の町村とのネットワークづくり

(1) 人口1,500人未満の村々：ダンスターと周辺の村々

サマセット州東部の人口800人の村ダンスター (Dunster) は、エクスマア国立公園内に位置し、同じくWaWタウン(2017年現在)である隣村の人口1,400人のポーロック (Porlock)、漁村のリントン (Lynton) とリンマス (Lynmouth) と協力、連携体制をとっている。

このエリアには、夏には海辺の観光地として全国的に有名な人口12,000人の町マインヘッド

(Minehead)があり、そこへ観光客が集中する。そのため、ダンスターなどの近隣の小さな村はWaWタウンとして協力し合うことでウォーカーを含めた観光客を誘致し地域振興につなげようとしている。

ダンスターは小さな村だが、ナショナル・トラストが所有するダンスター城があり、村には中世の建物や街並みが多く残っている。ハイストリートには小さな博物館や土産物屋があるため、観光を目的に訪れる人も多い。ダンスターには、年間75,000人が訪れる。村の博物館の年間の入館者数は18,500人である。人口が千人に満たない村の観光客数としては多いと言えるが、ダンスター城に年間16万人が訪れていることを考えると、それらの半数以下しか村を訪れていないことになる。

ダンスターには50ほどの小さなビジネスが存在する一方で、村の商工会議所はうまく機能しておらず、住民の高齢化により村の住宅が売られ別荘地化しつつあるという。生きたコミュニティとして村を維持するためには地域の活性化を推進する必要がある。

ダンスターのWaWグループは、村のホテル経営者と民宿経営者の2人である。同ホテルは28室あり、ダンスターで最も大きい規模である。彼ら2人が行政と話をし、村をWaWタウンとして登録し、その後、周辺の町村に住む活動的な人々や周辺のWaWタウン推進グループ、エクスマア国立公園スタッフと協力、情報交換しながらウォーカーを誘致している。

周辺のWaWタウンの1つであるポーロックには、図書館の建物を活用した観光案内所がある。観光案内所は、観光客向けの情報や資料、商品を扱うだけでなく、村の小学校の生徒たちが作成した絵や工作、地域の歴史や自然についての展示もある。図書館と隣合わせのため、住民にとってもコミュニティセンターのような役割を果たしているという。同観光案内所設立と運営には、18年勤めた前経営者が大きな役割を果たし、現在は4人のスタッフとボランティアで運営している。ダンスターのWaW活動を推

進するホテル経営者はその観光案内所の設立と運営を支援している。ポーロックは、ウォーキングルート上の村であり、彼の顧客を案内するさいに立ち寄るなど案内所を地域学習や休憩などで活用している。

小さな漁村リンマスとそこからケーブルカーで登ることができる丘の上の村リントンは夏の観光シーズンには多くの人で賑わう。リンマスにはエクスマア国立公園のビジターセンターがあり、海辺の自然について学ぶことができるとともに同国立公園の多様な自然環境について知ることができる。リントンへ登るケーブルカーは観光客に人気で、両村は観光客向けの土産物や食べ物を売る店やレストランが多い。リンマスとリントン間を歩くフットパスやリントンからリンマスを通過しないで海岸沿いを通り内陸部につながるフットパスがある。マインヘッドから始まる南西海岸フットパス (South West Coast Path) は、海岸沿いを通りながらリンマスやリントンに向かう。

マインヘッドからこれらの村々を歩いて回ることでもできるが、長距離となるため、車で移動してそれぞれにある多様なフットパスを少しずつ歩くことも可能である。このように、1村だけでは集客に限界や季節性がある村々は、WaWタウンとしてだけでなく、観光案内所や国立公園ビジターセンターなどで相互に情報提供することで観光客自体を誘致し、地域として連携している。また、WaW活動のメンバーと地域行政や国立公園スタッフとの情報交換も頻繁に行われている。

(2) 人口1,500人未満の村々：オーバー＆ネザー・ストウエイ

サマセット州西部の村々オーバー・ストウエイとネザー・ストウエイの人口は合わせて1,400人である。両村は内陸部にあり中世の姿を残すダンスターのような観光地でもなく、海辺の巨大観光地であるマインヘッドからも遠く離れており、訪れる人も少ない。

2005年には、行政がネザー・ストウエイか

らリンマスまで続く51マイル(81.6km)のフットパスを「コールリッジ・ウェイ」(Coleridge Way)と名付けた。ネザー・ストウェイには、ロマン派詩人サミュエル・テイラー・コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge)の家があるため、この道は彼の散歩道、ゆかりの道と想定して設定された。当時、英国政府は2001年の口蹄疫による家畜被害とフットパスの閉鎖により打撃を受けたカントリーサイドの復興と再開、観光客誘致を進めていた。その一環としてこの地域の「コールリッジ・ウェイ」も行政が設定し、被害を受けた村々をなるべく多くつなぎ、人々が訪れるようなルートにしたという。ナショナル・トラストが所有管理するコールリッジの家は、このルートの設定を受けて、同トラストによって2012年に修改築された。2014年にはビジット・イングランド(VisitEngland)³⁾からその年の優れた「小さな観光アトラクション」(Small Visitor Attraction of the Year)としてイングランド内で銀賞を受賞し、「コールリッジ・ウェイ」の出発点として観光客を惹きつける場所となっている。

オーバー・ストウェイは、イングランドで最初のAONB(自然景勝特別保護地域: Area of Outstanding Natural Beauty)であるクワントック丘陵(Quantock Hills)にその大部分が指定されている美しい景観の丘陵地帯にある。一方のネザー・ストウェイは、そのAONBのすぐ外側に位置している。そのため両村は、歩くのに適した良いフットパス・ルートが多い。その1つである「コールリッジ・ウェイ」も人が少なく、自然の中、丘を通るルートが多いのが特徴だ。

2016年には、オーバー・ストウェイで農家民宿を経営するウォーキング好きの夫婦とネザー・ストウェイで民宿を経営する女性を中心に、村を周遊する短い距離のウォーキングルートの冊子を書いた女性などを含む6人が、WaWグループとしてWaWタウン申請のために活動中だった。民宿を経営する女性の夫は、コールリッジに関する本を書き、フットパスに

も関心があるため、このWaWグループは「コールリッジ・ウェイ」のルートや歴史的な背景についても詳しい。彼らは、熱心に研究したウォーキングルートを地図つきの冊子として作成、販売している。地図上のそれらのルートを頻繁に歩いて確認する作業も行っていた。彼らがパンフレットや冊子を販売すると、地域住民が周辺のフットパスについてほとんど知らないからという理由で買い求めたという。WaW活動のメンバーたちは、地域住民が自信を持って地域を歩くためにそのような冊子が必要であることに気づき、それを普及させてWaW活動への地元の信頼を得ることで、活動を推進しようと取り組んでいた。その後まもなく、両村は「オーバー&ネザー・ストウェイ」として一緒にWaWタウンとして登録された。

このように、訪れる人の少ない村々では、行政が設定した長いフットパス・ルートを活用し、村のWaW活動メンバーで相互協力しながら、ウォーカーを誘致している。さらに、彼らは住民の間に自然環境を活かした村の短い周遊ルートを周知させることで、地域活性化に取り組んでいる。

(3) 周辺の町村をつなぐフットパス・ルートの形成

2016年、イングランド北部に位置する西ヨークシャー州の3つのWaWタウンで、それらの町村をつないで歩く「ウエルカム・ウェイ」(Welcome Way)が作られた。人口15,000人の町オトレイ(Otley)のWaWグループが中心となって作った同ルートは、全長28マイル(44.8km)で近隣の人口7,000人の村バーレイ(Burley-in-Wharfedale)と16,000人の町バイルドン(Baildon)を結んでいる。3町村は2008年からの数年でWaWタウンに登録された比較的初期のWaWタウンである。隣接しているが、属する行政市は異なる。1年に2回、これらの町村のWaWメンバーが集まり、情報共有している。

「ウエルカム・ウェイ」は、オトレイのWaW

メンバーが既存のウォーキングマップをデジタル化し、他のメンバーと相談してフットパスを実際に確認して歩いてまわって作成した。「ウェルカム・ウェイ」の冊子は、15,000部売れ、再版の1,000部も1年で売り切れたという。これに伴って、オトレイと地域のウォーキング関係の冊子も周辺の5つのコミュニティで売れた。オトレイは古い市場町で歴史がありながらも、15店のパブ、34店のカフェがあり、利用者の年齢層も多様である。新しく宅地開発をしているため、小学校6校、中学校1校があり、若い人口も多く、町に活気がある。町の70店舗がWaWタウンのロゴマークを窓に貼っており、WaW活動に対しても協力的である。オトレイはリーズ市に属する町だが、このようなオトレイのWaW活動には、北ヨークシャー州と西ヨークシャー州、ブラッドフォード市から補助金を得ている。フットパスの維持管理としてスタイルの修理やゲートの設置なども行政が行い、地域行政のWaW活動への支援は手厚い。

一方で、ブラッドフォード市に属する村バーレイは、行政の支援は少ない。そのため、バーレイのWaW活動は、村の商店などから寄付を募るサポーターシステムで運営している。村のフットパスを歩いていると、パブや美容院などのスポンサー商店に出会う。村にはウォーキング活動はないが、教会や健康ウォークのグループが歩くことを促進している。WaWグループは、それらのグループと協力し、村でのウォーキングを促進し、コミュニティに人を連れてくる活動を展開している。2014年にWaWグループは村の夏祭りの一部に参加してウォークを開催、翌年には3つのウォーク、2017年には11ウォークへと拡大した。

バーレイのWaWグループは、この2年間で、教区行政、ブラッドフォード行政市、地元のパブと商店、ボランティアグループの支援で、周辺のフットパスに6つのゲートを設置した。WaWグループは、行政にゲートの供給を依頼し、行政はゲートを調達するが、設置はWaWグループ自身で行う。フットパスの草刈りなど

も同様に、WaWグループのメーリングリストの人々に連絡して人々が無償で行っている。

このように、バーレイでは住民自身がフットパスの維持管理に直接的に関わり、村の商店が支援するという取り組みがなされている。そのなかで、比較的ウォーカーが集まりやすいオトレイとの連携で誕生した「ウェルカム・ウェイ」によって、コミュニティでウォーキングを促進し、夏祭りを活用してウォークを実施するなど、WaW活動を促進し地域の活性化につなげている。

II フットパスやウォーカーと関わる観光産業

1. ウォーキング旅行会社

英国にはウォーキング旅行会社が数多くある。ここではWaW活動に関わっており、着地型のもとは他地域も斡旋する発地型に近いサービスを提供している事例を取りあげる。

(1) 着地型ウォーキング旅行の提供

イングランド南西部のコッツウォルズ地域北部の村ハニーボーン (Honeybourne) には、コッツウォルド・ウォークス (Cotswold Walks) という、ウォーキング旅行を外国人旅行者向けに斡旋する会社がある。コッツウォルズ地域は、AONBに指定されている丘陵地帯で、国指定の長距離歩行道ナショナル・トレイル (National Trail)⁴⁾の1つである全長100マイル (160km)の「コッツウォルド・ウェイ」が南北に通る。この地域には、145の小さな町村が点在し、村々をめぐるフットパスや各町村の周辺を歩くものなど、「コッツウォルド・ウェイ」以外も比較的平坦で歩きやすく、眺望の良いフットパスが多いのが特徴である。

同社の顧客は、30%がヨーロッパの旅行代理店が占め、ドイツ、オランダ、スウェーデン、デンマークが多いという。70%から80%はアメリカとカナダの旅行代理店によるパッケージツアーで、3%から5%が日本からの旅行者であ

る。アメリカの旅行代理店には値引きし、ヨーロッパの旅行代理店には特別な予約を代行している。

基本的に顧客自身がガイドするセルフ・ガイド (self-guided) でのウォーキング旅行を提供している。つまり、宿泊施設と朝食は手配するが、交通については自身で予約してもらうというスタイルである。日数や推奨するものによるが、コッツウォルズ地域を顧客にカスタマイズする、コッツウォルド・リンク (Cotswold Link) という6日間または3、4日間のウォーキング旅行を提供している。同地域の町村を周遊し、宿泊しながら歩くもので、企画側がフットパスのルートに精通しているからこそ可能になる。歩くさいには、地域専門のウォーキング・ガイドをつけることもできる。そのガイドとしてウィンチコムのWaWグループの活動メンバーが働いている。そのため、同社はWaW活動への理解があり、そうしたウォーカーの誘致による地域活性化に協力的でもある。また、外国人旅行者向けの宿泊施設を斡旋するため、地域の民宿やホテルなどとのネットワークも構築している。

次項で述べるが、WaWタウンの小規模ホテルで着地型ウォーキング旅行を提供しているところもある。

(2) 着地型と発地型ウォーキング旅行の提供

スコットランドのスコティッシュ・ボーダーズに位置する町メルローズ (Melrose) にあるウォーキング旅行会社は、交通と宿泊施設の手配を行う。基本的にはセルフ・ガイドのスタイルをとっているが、大きなグループになると迎えに行きウォーキングを引率するという。人口3千人の町メルローズは、ローマ時代のスコットランド首都という歴史がありメルローズ修道院跡と町並みの美しさからスコットランドでも有名な観光地である。一方で、その周辺にはエイルドンの丘や鮭釣りでも有名なトード川があるため、フットパスには起伏がありスコッ

トランドの自然を楽しめる。このあたりのフットパスを歩く人は少ないので、観光客で賑わう町の中心からはずれてフットパスに入ると静かで歩きやすい。

この会社経営者は、メルローズのWaWグループの活動メンバーではないが、WaWグループのウェブサイトを担当しており、自身も地域のフットパスとウォーキングに精通している。彼は、仕事上1つのルートに顧客の荷物輸送システムを作ったが、他のルートでは他のウォーキング旅行会社が行っているという。14から17のウォーキング旅行会社が広域で営業しているという。ウェブサイトで、メルローズの着地型ウォーキング旅行を手配し、さらに周辺地域やメルローズから離れた地域のウォーキング旅行についても請け負う。そのように着地型と発地型に近い形の両方を行っているウォーキング旅行会社は少なくないという。

2. ウォーカーが利用する宿泊施設

ここでは、各地のWaWタウンでウォーカーが利用している宿泊施設について事例をあげながら述べる。

(1) ホテル

各地のWaWタウンで、ウォーカーを積極的に受け入れているのは小規模ホテルが多い。上述したサマセット州の村ダンスターでは、WaWグループの活動メンバーがホテルを営んでいる。そのホテルは客室数28で同村では最大規模である。春から夏にかけてホテル主催の着地型ウォーキング旅行を実施して宿泊客を誘致している。ヒースロー空港やダンスターの最寄り鉄道駅までの送迎もホテルが行う。そのウォーキング旅行は、ダンスター周辺の村々をめぐって歩いたり、海岸沿いのフットパスを歩いたりというエクスマア国立公園の多様な自然を体感するものである。それは、WaWグループとして周辺町村や国立公園スタッフとのつながりがあるからこそ充実する内容である。

コッツウォルズ地域中部の町ウィンチコム

Oct. 2018

英国におけるパブリック・フットパスと地域振興 (part 2)

(Winchcombe) のイン (inn) は、客室数11で、計22人まで収容可能である。WaWステッカーをホテル玄関の窓に貼付しているだけでなく、11部屋のうち最上階の3部屋をウォーカー向けに宿泊料金を割引設定している。5月から10月までの宿泊客の大半はウォーカーで、宿泊客は世界中からやってくるという。同町には宿泊施設が少ないため、この小規模ホテルはウォーキング・グループにとって全員が泊まれる唯一のホテルとなる。2015年8月には、日本からのウォーキング・グループが翌年5月に6部屋の宿泊予約を入れたほどである。

(2) 民宿

民宿 (Bed & Breakfast) は、ホテルに次ぐ価格帯の宿泊施設である。インの中には民宿と同じような価格のものもあるが、民家ではない。ここでは、WaWタウンでウォーカーがよく利用する一般的な民宿と農家民宿を取り上げる。

イングランド北部の町ヘブデン・ブリッジ (Hebden Bridge) は WaW 活動発祥の地であり、近くにナショナル・トレイルの「ペナン・ウェイ」 (Pennine Way) がある。この町で WaW 活動をしているグループが紹介している民宿は、朝食付きで1泊1部屋45ポンドというリーズナブルな価格である。町の中心から近く、すぐ隣には綿布工場の建物をホテルに利用した高級なベントハウスがあることを考えるととても良心的である。宿主は、ヘブデン・ブリッジに30年以上住む女性で、築200年のその家は家族で暮らしてきた建物だが、子供たちが独立したので、2008年に民宿を始めたという。廊下には冷蔵庫と電子レンジが設置されており、各階に2部屋ずつあり、各階にあるバスルームは共用である。数日から1週間以上滞在するには快適な施設である。この民宿には多くのウォーカーやサイクリストが世界中からやってくる。宿泊客が残した宿帳には多くのメッセージが残されており、彼らから親しまれた宿であることがわかる。

スコットランドのメルローズにある民宿は、

町の中心部にあるが1泊40ポンドと良心的な価格で、シングル・ルームもあり、計9人宿泊可能な施設である。メルローズのWaWグループが紹介している宿で、世界中から来る多くのウォーカーが宿泊する。ウォーカーに人気だという長距離フットパス「聖キャスパート・ウェイ」 (St. Cathburt Way) が近くにあり、朝食時などに宿泊客同士で情報交換ができる。宿主の男性は、32年間 (2017年現在)、民宿を経営しており、かつては同町で農家をしてしたが、農業で生計を立てることが困難になり、民宿を開業したという。

次に、農家民宿の例をあげる。スコットランド北部の町キルサイス (Kilsyth) にある農家民宿は1泊30ポンドで、町の中心からやや離れた丘の上にある。宿主は、23年間 (2017年現在)、民宿を営んでいる女性で、開業当時の1994年には彼女の4人の子のうち末娘が8歳だったという。現在、その末娘が2人の子供をもち、近くに住んでいるため、民宿の手伝いにきている。農家として91年続いているその家では、夫が3,000匹の羊を飼って農業を続けている。宿主は、宿泊客の朝食の支度だけでなく、ボランティアでホスピスに行ったり、家の芝刈りなどもこなす。キルサイスのWaWグループが紹介しているこの農家民宿は、農家の歴史を感じさせる家と良心的で暖かいサービスを提供している。

イングランドのオーバー・ストウエイの農家民宿は、同村のWaWグループの活動メンバーが経営している。24年間 (2016年現在)、同村に暮らしている宿主の夫婦は、ウォーキング好きで、子供たちが成長したため、農業を営みながら民宿経営をしてきた。農家民宿は、副収入として始める場合が多い。同農家民宿は、ネザー・ストウエイで民宿を営むWaWグループの別のメンバーから宿泊客を回してもらうなど、彼らの間で互いに協力してウォーカー誘致につとめている。農家民宿はそもそも農家であるため、町の中心部から離れていることが多い。牧草地や家畜、農業など自然を感じながら過ごすこ

とができる。宿泊客は車でアクセスする必要はあるだろうが、歩いて宿泊場所まで来るウォーカーにとって、農家民宿は彼らの靴についた土や泥を心配する必要なく受け入れてくれる宿泊施設でもある。

また、ウォーカーが多く泊まる民宿では、ウォーカーの荷物を次の宿泊施設に運ぶサービスをしているところも多い。一度に40マイルから50マイルを約12ポンドで運ぶという。荷物の移動はそれを専門に行う会社もあるが、すべてのフットパス・ルートにあるわけではない。宿泊客であるウォーカーの荷物の移動を民宿に頼むことは、民宿の経営にとっては追加収入となる。ウォーキング旅行会社などは、こうした側面を活用して民宿と連携して顧客の荷物を運ぶことが多い。さらに、宿泊客であるウォーカーが歩き終わった地点に車で迎えに行き、つぎの地点まで運ぶサービスをする民宿も多い。

(3) ユースホステル

民宿よりも安い価格の宿泊施設として、ユースホステルがある。各地にあるためウォーカーには利用しやすい施設である。多くの場合、ユースホステルは町はずれにあるが、ウェールズのチェプストウ (Chepstow) には、町中心部にある歴史的建築物を修復し内部を改装したユースホステルが2016年にオープンした。主にドミトリー形式の部屋だが、民宿のようなシャワー付きの個室も数部屋ある。

同ユースホステルは、チェプストウのWaWグループが推薦しており、経営者もWaW活動に理解がある。長い年月をかけて歴史的建築物を修復しながらユースホステル向けに改装していたため、町ではWaW活動を積極的に支援し協力する行政からもWaWグループからもそのオープンが注目されていた。さらに、WaWグループと連携しているタウン・ガイドが経営者の友人ということもあり、地元のネットワークを活かした宿泊施設経営を展開している。

(4) ホリデー・コテージ

ホリデー・コテージ (holiday cottage) は、炊火ができる貸し別荘のような住宅で、最低3泊から1週間単位で貸し出すものが多い。ウィンチコムで10年以上ホリデー・コテージを貸している夫婦は、ウィンチコム WaWグループとWaWのウェブサイトを通して広報し、WaW活動にも協力的である。同コテージは、ナショナル・トレイルである「コッツウォルド・ウェイ」のルート上にあり、歴史的な建物でもあるコテージが並ぶその通りは、ウィンチコムでも美しい通りの一つと言われているという。

同コテージは、ウォーカー歓迎のWaWステッカーを窓に貼付している。そのステッカーを見て家のドアをたたくウォーカーも多いという。宿主は、ウィンチコムがWaWタウンになってからコテージの貸し出しが増えたと話し、宿泊客には必ずウィンチコムがWaWタウンであることや周辺のウォーキング・ルートについて話すという。ダブルベッド2台で4人収容可能な宿だが、稼働率は年70%と高い。シーズンオフ時は1週間の貸し出しで1日99ポンドである。

近年、犬を連れて旅行したり、ウォーキングをしたりする人が増えているので、ホリデー・コテージでは犬同伴の宿泊を認めるDog Friendlyという傾向がある。このコテージも50%の宿泊客が犬を連れてくるという。最近、このコテージがある通りの3軒がホリデー・コテージ向けに改築された。ホリデー・コテージは、民宿よりも手軽にできる宿泊施設であり、カントリーサイドの観光地や高齢化が進むコミュニティでは、住民ではない外部の人々が住宅を買い取りホリデー・コテージとして改装する数が増えている。

(5) キャンプ場

英国では、キャンピングカーで来てそのまま泊まれる場所と施設があるキャンプ場 (camp and caravan site) は、1泊15ポンドほどで自由に過ごせるため、幅広い年齢層の人々に人気

がある。全国組織のクラブもあり、キャンプ場は英国内に115ヶ所ある。ウォーカーもキャンピングカーでやって来てキャンプ場に駐車し、キャンピングカーに寝泊まりしながら周辺のフットパスを歩くことも多い。

ウィバリスCOMのキャンプ場は、町の中心から少し離れた牧草地にあり、共用のシャワー設備や冷蔵庫、地域の情報コーナーもある。キャンピングカーで来ている人々もいれば普通の自家用車で来ている人々もいる。

ウィンチCOMに近い町ブロードウェイ (Broadway) のはずれにあるキャンプ場は、受付にスタッフが常駐し、簡易な共用設備がある。施設スタッフによると、ウィンチCOMがWaWタウンになり、WaWグループが広報したおかげで、より多くの人と同キャンプ場を利用するようになり、ウォーキング地図もより多く売れるようになったという。

3. パブリック・ハウス

ここでは、パブリック・ハウス (public house, 以下パブ) とウォーカーの関係、さらにパブとコミュニティの関係について述べる。

(1) 多彩なビジネスを展開

パブは、地ビールなどの飲み物や料理を提供する居酒屋兼レストランである。さらに、カントリーサイドにおいては、パブは各町村に1軒以上ある。英国ではウォーカーにとってもっとも馴染みのある休憩場所である。パブは、カントリーサイドでは宿泊施設でもあり、民宿に近い価格から泊まれるカジュアルな宿である。とくに、長距離フットパスを数週間かけて歩くウォーカーにとっては途中の小さな町村で泊まることができる数少ない宿でもある。

一方で、地元住民にとっては、パブは単なる居酒屋としてだけではなく、家族や友人と食事をする場所であり、地域で所属する多様なグループや仕事仲間、近所の顔なじみが集まる親しみのある場所である。

WaWタウンではないが、コッツウォルズ地

域北部の町チップング・カムデン (Chipping Campden) のパブでは、ウォーカーなどの荷物運搬業を地域内のビジネスとして立ち上げた。この町は、「コッツウォルド・ウェイ」のスタート地点であり、文化財密度が国内第2位という歴史的建築物が多い町並みのため観光客も多く訪れる。現在、同パブは年間に15,000個から17,000個の顧客の荷物をコッツウォルズ地域内の宿泊施設へ運んでいるという。この荷物運搬業が成り立つ背景には、同パブが古くから地域に根づき、地域内にネットワークがあるからこそ可能なビジネスである一方で、地域内でウォーカーが増加傾向にあることがわかる。前述したコッツウォルズ地域のウォーキング旅行会社は、このパブの荷物運搬業も利用している。

(2) コミュニティ・パブ

サマセット州のウィバリスCOMのパブでは、チャリティ・ウォークを実施している。同パブの30代の経営者は、同町のWaWグループの活動メンバーであり、彼と同じく熱心なウォーカーである同パブ料理長とともに、地域内のフットパスをくまなく歩いて回り、人々にあまり知られていない道も発見するなどして、地域に10マイル (16km) の新しいウォーキング・ルートを作ったという。さらに、短い距離で歩きやすい、子供向けの3kmのウォーキング・ルートも開発した。これらをそれぞれチャリティ・ウォークとして参加者で歩くイベントを実施したのである。1回目のチャリティ・ウォークには40人が集まった。参加者は全員が地元住民であり、子供向けのウォークでは子供を含む家族連れが30人集まった。また、普段は夕方からパブにやって来る若者たちにも声をかけると、自分たちが知らない地元を知ることのできるこのウォークに若者18人が参加したという。一般的に、小さい子供がいる家庭や若者は、ウォークに参加することやウォーキングに関わる機会が少ないが、このパブのイベントはそれらの年齢層の地元の人々をウォークに結びつけることに成功した。

このパブの経営者は、このほかにもビール祭りなどのコミュニティ行事やイベントをパブで開催している。パブという施設を利用してもらうだけでなく、こうした催しやウォークを通じてコミュニティの核としてさまざまな年齢層の人々を結びつける役割を担いたいと考えていると話す。とくに、若い世代のための「コミュニティ・パブ」を目指しているという。

パブには、その歴史や地域とのつながりから、こうした役割を担うことができる場合が多い。前述したチップング・カムデンのパブもチャリティ・ランなどのコミュニティ・イベントを積極的に開催している。その意味で、チャリティ・ウォークを通して地域住民に歩いて地域を知ってもらう活動は、コミュニティの核としてのパブの役割に適しているといえるだろう。

おわりに

小さな町村のWaWタウンでは、大きなWaWタウンとは異なる方法や形でWaW活動が展開されていることが明らかになった。

WaW活動以外にも多様なコミュニティ活動が活発なウィバリスコムでは、それらの活動によって醸成された住民のコミュニティ意識が基盤となり、WaW活動を効果的に促進している。一方で、周辺の町村とネットワークをつくることでWaW活動を促進し、地域活性化に導こうとしている村々もある。ダンスターと周辺の村々は、1つの村だけでは十分な集客に限界があるが、観光案内所や国立公園ビジターセンターなどを通して観光客を誘致し、地域として情報交換しながら連携している。オーバー&ネザー・ストウェイは、訪れる人自体が少ない村々だが、行政が設定した長距離ルートを活用し、2つの村の活動メンバーで協力しながらウォーカーを誘致している。村の住民に対しても周遊ルートを知りさせることで地域活性化に取り組んでいる。また、バーレイでは、比較的ウォーカーが集まりやすい町とつながる周遊

ルートによってウォーキングを促進する一方で、住民自身がフットパスの維持管理に直接関わり、村の商店などが活動を支援する形がとられている。

フットパスやウォーカーと関わる観光産業として、着地型旅行を提供するウォーキング旅行会社は、民宿やパブが行う荷物運搬業をうまく取り込みながら国内外から訪れるウォーカーに対して地域をフットパスによってカスタマイズしている。さらに、ウォーカーが利用している宿泊施設には多様性があり、それぞれがウォーカーに適したサービスを提供していることが明らかになった。

WaW活動に協力的なホテルは小規模なものが多いが、ウォーカー向けの割安な部屋を用意する所や着地型ウォーキング旅行を提供している所もある。各WaWタウンのWaWグループが推薦する民宿では、ウォーカーが宿泊しやすい設備を整え、フットパス・ルートの情報を提供している。農家民宿は町の中心部から離れたところにあるが、歩いて到着するウォーカーにはむしろ適しており、牧草地や家畜、農業など自然を感じながら過ごすことができる。民宿には次の宿泊場所へ荷物を運搬したり、歩くスタート地点やゴール地点への送迎をしたりするところも多い。ユースホステルはより安く宿泊でき、ホリデー・コテージでは自炊して数日以上滞在できる。キャンプ場は、キャンピングカーなどで来て地域を歩くウォーカーには格安で泊まれる設備を備えている。

パブは、居酒屋、レストラン、宿屋として英国のウォーカーにとっては不可欠な場所である。中にはその地域密着型の特性を生かして荷物運搬業を展開しているパブもある。パブがウォークやイベントを開催することで、多様な年齢層の住民を結びつけ、ウォーキングを促進し、歩くことで地域を知り、活性化する役割も担っている。各町村に必ず1つはあるパブは、ウォーカーへのサービスという点だけでなく、WaW活動の地域活性化においてコミュニティの核となりうるということがわかった。

Oct. 2018

英国におけるパブリック・フットパスと地域振興 (part 2)

注

- 1) 同調査は、2015年度科学研究費補助金基盤研究(C) 15K03067「英国のパブリック・フットパスをめぐる文化・社会的環境の構築に関する文化人類学的研究」(研究代表者 塩路有子)、ならびに基盤研究(B) 15H03280「下からの地域開発の実践—フットパスと農村民泊による展開」(研究代表者 前川啓治)により可能となった。本稿の内容には、2013年から2014年に実施した調査の結果も含んでいる。
- 2) 2015年10月末には英国内の116の市町村がWaWタウンだった(塩路 2016: 215)。しかし、その後WaWタウンとしての登録条件を満たさなくなり、WaW活動が不十分だと判明した市町村などがWaW協会によって登録を取り消された。
- 3) ビジット・イングランドは、英国政府観光庁であるビジット・ブリテンの統括下にあるイングランド観光局にあたる。
- 4) ナショナル・トレイルは、国指定の長距離フットパスで英国内に15本あり、全長約4,000kmに及ぶ。

1本が数10kmから1,000kmのものまであり、多様なコースと自然景観が楽しめる。

参考文献

市村操一

2000年『誰も知らなかった英国流ウォーキングの秘密』山と溪谷社。

塩路有子

2003年『英国カントリーサイドの民族誌』明石書店。

2016年「英国におけるパブリック・フットパスと地域振興—Walkers are Welcome タウンの活動—」阪南論集 社会科学編 第51巻3号, 213-221ページ。

平松紘

1999年『イギリス緑の庶民物語:もうひとつの自然環境保全史』明石書店。

2002年『ウォーキング大国イギリス:フットパスを歩きながら自然を楽しむ』明石書店。

(2018年7月12日掲載決定)